

tab

No.
15
2009/03/15

後藤美和子／木村和史／石川和広／
野村龍／長尾高弘／高塚謙太郎／
近藤弘文／福島敦子／タケイリエ／
倉田良成

榊 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：蝶の夜・遊泳地／01
石川和広：手紙／03
近藤弘文：が折れた腕や4／05
野村龍：水／06
高塚謙太郎：泳ぐ人／07
福島敦子：マボロシに寄り添って・徳用日高昆布／08
タケイリエ：すきとおるまで／11
長尾高弘：二〇〇九年／14
倉田良成：雲のいづくに——私の小倉百首から／19

文

- 木村和史：からす／21
倉田良成：悪人正機説について／23

あとがき集／27

画：和田彰

tab 第15号／2009年3月15日(毎奇数月発行)

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kateis111@k3.dion.ne.jp



後藤美和子

蝶の夜

とぼりを下ろし暗闇で

蝶が死んだ、蝶が死んだと叫ぶ人

死んだのは蝶ではなく、お前だ

みんなが泣いて、空の色は青くて

水飲み場にはぼうふらが集まっていた

ぼうふらは何になる？ 蝶になる？

ぼうふらは蝶にはならない、何千年待っても

あれはもう戻ってこない

たくさんの棒が立っていて

それが痩せこけた電信柱だと気づくまで歩いた

電灯がひとつ点滅していて

美しい白色光が、光を発し、ふと消えた

息を飲んで待つ、次の光を、待ちながら人は集まり

消えたままの燈を

波間の黒い灯台を

見上げ続けて夜を明かした

遊泳地

河原には夕方の暖かさがあつた

大きな銀の魚が切られたように直立するのが

この地方では見られるという

「あちらに」と指さす先に

海藻のように魚たちは立ちあがる

焚き火が燃えているようなぬるい風

やがて彼らは上昇を始め

天空の黄道帯を東西にゆつくり横断していく

私は小さな目玉を腰からはずし

流れる魚を手で追い続けた

銀のうろこが群青にはりついて

いくつもの月のように光っていた

(皆既蝕四十六)

石川和広

手紙

正義のみかたです

これからもよろしく願います

こまったことがあったらなんでもいつてね

ぼくはきみのことが大好きなんだ

地の果てまで悪を追いかけていくよ

それがどんな敵かは

きみの判断によるんだけど

あとはまかせてくれたらいいよ

いい感じで倒してみせるよ

ぼくの使命はまあいろいろあるんだけど

きみを苦しめる悪を倒すことにあるよ

きみがどんな生活をしてて

どんなにひどいやつでもぼくはきみを守る

きみは

友達だ

友達のはんたいは敵だからそれをたおすんだね

友達ってなんだろうね

かんがえるんだけどさ

その作業はぼくの設定のげんかいを越えているんだね

たてものをこわしてごめんね

きつと中に人がいるんだね

だけど

ぼくのビームやキックではこわすことしか出来ない
直して帰らなくてごめんね

アンパンマンさんはじぶんの顔を分けられるけど

あのアンパンはうまいんだろうか

あとね、きみ自身に未来はかかっているんだよ

ぼくをいつでもリストラしてくれてかまわないんだ

さびしく宇宙の端でじっとしておくから

正直なところ

きみ自身の手できみの友達を守った方がいいと

いつも思うんだ

でもそれはいわない約束なんだよ

近藤弘文

が折れた腕や4

わたくしは閉じられ

はなすことははなすこと

は灰色の髪に

をあるきだすまでのあいだに

の洞窟では

とともに

が現像された日没をカテドラルへと

をこのなにもない泥濘の声としてはこぶはこたちが

のほろびる糸杉の零度は

にたえまなく投身する息のかけらを

は黒い墓さえ

がきこえたのであつた

を知らない胡桃の結晶があり

野村龍

水

通り雨のあとに残ったのは

ちいさなルビーと

微かな髪の毛の香り

どれほど

(鋭い剣で)

心を貫かれる日々を送っても

それでも歩いて行けるのは

咲き乱れるクロッカス達が

我先に

黄緑色の 艶やかなあまい蜜を 惜しげもなく
心にあいた穴に 注ぎ込んでくれるから

やがて 翼が産み落とされ

希望は深い眠りから醒める

凍えた 羊達のために

森は 暖かな闇のなかで

いつの間にか

ひとまわり大きくなる

最後に 囁きが静かに訪れるまで

高塚謙太郎

K氏、耽る。

2 泳ぐ人

白々と沈む陽のただ前で島は一件の家屋、灯台、そして防壁を抱いている。

赤い水着の女が妊娠線上にたゆたい海は水平に浸そうとそして浸している。

その定まらない視線、微かな鷗のような波頭、島は泳ぎつく浜を用意している。

落陽の上の山並みのような雲は登頂だけを赤くたなびかせて、女は泳ぎすすむ。

女の未発達足指から不意にしかしながら深く拡がる黒への大洋、その最中の島にも緑はある。

家屋へは続かない道もあり、それは灯台へも伸びていない。

灯台壁の白い面と直角に家屋は窓から赤いカーテンを垂らしている。

女の掌の指がかく黒は、豊かな二の腕から、平板な脇腹を通り、腹の贅肉の部分で小さくわだかまる。

黒く引かれた眉そして頭頂から分かれた栗色の毛髪そこから海のまだしも白い時代が流れている。

島に生物はみられないのは一切の目である。

福島敦子

マボロシに寄り添って

父は久しぶりにマボロシが見えたみたいで

先生がおる！と言って

靴を持ち早朝五時に二階にやってきた

ふとんの上に土がばらばら落ちる

あらあら

どうしたん？

わたしは父を落ち着かせ

朝ごはんの後に以前もらってあった

マボロシを消す薬を飲ませた

先生

職員室にいつぱい

などの言葉から読み取ると

どうも父は二十代の記憶の中にいるらしい

わたしが生まれる前の十年間ほどは小学校の先生だった

昔 十数キロを自転車に通っていた

山あいの小学校を見に行こうよ

と誘ったけれど

行きたくないと言われた

父が行きたいのは現在の小学校ではなく

記憶の中の小学校なのだろう

子供みたいソファの下ですやすや眠り出す

何もいらぬどこにも行きたくないと言う父
のマボロシに寄り添って

わたしは少しの間じっとしていた

わたしが生まれる前の若い父を
見つめていた

白くひかりがはじけて
まぶしい

徳用日高昆布

お味噌汁は毎朝

徳用日高昆布とシマヤだしの素で作る

夜 台所の明かりを消す前に

徳用日高昆布の小さなかけらがスリッパの横に落ちているのに気づいた
気になったけれど

まあいいかとそのままにしておいた

翌朝

スリッパを履こうとしてしゃがんでその黒いかけらを拾った

なに！

これ うんこやんか

おとうちゃん！

素知らぬ顔でテレビを見ている父のジャージを脱がせ
ももひきを脱がせパンツを脱がせて調べる
が 少しパンツが汚れているだけだ
すべて洗濯機に放り込まれ
手間なしブライトと洗剤で洗われる

コタツぶとんをめくり

寝間に行きふとんをめくり枕をひっくり返し
すみからすみまで調べるけれど どこも汚れていない

おむつの中にあまずっぱいうんこをする

幼い子を育てていた頃でもこんなことはなかった

どうして？

このうんこはどこからきたの

わたしのお世話はこれからどこまで行くの

今はまだ 小さなかけらの

徳用日高昆布と

タケイリエ

すぎとおるまで

ざくざくした歯ざわり

かのじよたちは

たべる

やわらかいまるい歯が

しろい肉をけずって

トンネルをつくりだすと

まっくらがふえすぎて

かのじよたちは

ぞろぞろと潜りこみ

いきをひそめ

身をしのばせる

まっくらは

宇宙のように

やさしいので

かのじよたちは

あんしんしきって

むくむく太る

切ってひろげたら

おいしそうになって

しろい肉がふやけている

かのじよたちは

ちぢんだりのびたりする

のが とくい

だったし

とてもすきだった

ころころわらって

ときどきおたがいを

たべあう

からだをよじらせる

まっくらが

ぞくぞくとふえる

やがてまっくらは

とうめいな

どうくつに成長する

かのじよたちは

しばらく

なやましく

じかんをひねって

かんがえている

ぬけがらのような

まっくらを隅に

押しやっつて

とうめいと話しあっている

それからたんけん

と みせかけて

速度をしだいにあげてゆく

そこで

ふたたび

まっくらが現れたら

やわらかくてまるい歯をたてて

まっくらをかみころす

そうしてやっど

とうめいを吸って

とうめいをくぐって

とうめいな光となって

ぐんぐん高いところへ

のぼってゆけるのだ

このみちのりをへて

すきとおってゆく

二〇〇九年

1

この年末から、
年明けにかけて、
ここからちよつと離れたところでは、

飛行機が飛び回って、

地上の人々を、

撃ち殺していた。

年始にかけて、

この「自衛行動」は、
少なくとも千三百人を殺した。※1

2

ちよつとではないのかもしれない。
ここでも飛行機は飛び回っているが、
その下を歩いているからと言って、
撃ち殺されるとは、

誰も思っていないのだから。

同じ銃器を搭載した同じ飛行機でも。

3

飛行機を飛ばしている方の言い分では、
撃ち殺されている人たちの方から、
ロケット弾が飛んでくるから、
自衛をしているのだそうだ。

この五年間で五人もなくなっているそう
だ。

えらいことだ。

この年末から、

4

遠く離れたところからでも、
情報は一瞬のうちに送られてくる。
がれきの山の中で、

臥せっている人の写真も、

ケーブルを通って入ってくる。

死んでいるのだ、きつと。

生きて写っている人も、

両親を殺されるか、

兄弟を殺されるか、

子供を殺されるか、

手足を吹き飛ばされるか、

目を潰されるか、

それらを複数兼ねているか。

5

ここで「私」が出てくる。
出てくる必要はないような気もするが、
出てくる。

この年末から、

年明けにかけて、

毎日のように、
大量殺戮のことが「私」の目に入ってきた。
た。

「怒り」を感じ、
「悲しみ」を感じ、
「無力」を感じた。

毎日五分ほどのことだ。
そして日常に帰っていく。

6
この年末から、
年明けにかけて、
このあたりでは、
くびになった人もいた。

7
くびになるというのは、
くびを切られるという言葉を略したもの
で、

くびを切ると、
胴体がなくなって、
くびだけになるから、
くびになる。

8
くびになるとか、
くびを切られるとか言っても、
それは比喻で、
本当に切ってしまうわけではない。

働きに来てもお金を上げられないから、
来なくていいよ、
と口で言うだけだ。

でなければ、
紙に書いて渡すだけだ。
くびになった人の中には、
くびをくくる人もいて、
それは比喻ではない。

9
ここでもう一度「私」が出てくる。
仕事がなくなったことはあった。
働く意思があっても、
働かせてもらえないのは辛いことだ。
何が辛いかというと、

収入がなくなる、
収入がなくなると、
いずれ生きていけなくなる。
この年末から、

年明けにかけては、
仕事がないということはない。
以前の辛さは記憶になった。
収入を得るために仕事をする。
それが日常。
それが一日のほぼすべて。

10
生き残りをかけた競争、
という言葉が当たり前のような顔をして、
本棚に座っている。

競争に勝てば生き残るが、
そうでなければ生き残らない。

競争に勝てないということは、
死ななければならないような罪なのか？

競争に勝つことが、
人を殺してもいいような手柄なのか？

11

競争に勝つことを、

夢と表現した国。

競争に勝てば、

千人万人が生きられるだけの収入を

一人占めにしても、

罪悪ではない。

だって、それは競争に勝つだけの

理由があつたから。

その人が優れていたから。

競争に負けた人が負けたのは、

その人が劣っていたから。

12

競争に勝つことを、

夢と表現した国は、

国と国との競争に勝って、

どこよりも力のある国になった。

国の力とは金と暴力。

力があれば、

人を黙らせることができる、

と思う驕り。

13

夢の国には、

世界中の国から、

人々が集まってきた。

だからこの国は世界の縮図。

縮図の中にも競争があり、

勝者と敗者がある。

この国の元首に上り詰めた人物が、

あるときこう言った。

「首都で強気なことを言っても、

11を守るわけでも、

12を抑え込めるわけでもない」※2

11も12も国の名前。

夢の国に無条件で守ると言ってもらえる国

は、

縮図の中での競争に勝つたのだろう。

それでも「自衛行動」をするようだが。

14

この年末から、

年明けにかけて、

夢の国は次の元首が決まっているが、

まだ就任していない時期。

「自衛行動」は、

その隙間のような時期を狙って行われた。

就任式の数日前に「停戦」が宣言された。

「停戦」と言っても「一方的」なもので、

攻撃が終わったわけではない、

という情報が、

ケーブルを通して入ってくる。

15

夢の国はここから近いのか、遠いのか。

この年末から、

年明けにかけて、

このあたりでくびになった人が

たくさん出たのも、

夢の国で破産した会社や人が

たくさん出たからだ。

このあたりでくびになった人々は、

自分たちのためではなく、

夢の国のために、

ものを作らされていたのか？

16

くびになって、

この年末から、

年明けにかけて、

公園の一角に集められた人々。

今はどこにいるのだろうか？

仕事にありついた人もいるだろうが、

そうでない人の方が多いだろう。

その後にくびになった人もいるのだろう。

くびになることはもう他人事ではない。

17

最後にもう一度、「私」を登場させてみよ

う。

「私」の日常はさしあたり続いている。

まわりは、目を覆いたくなるようなことば

かりだ。

目を覆いたくなるようなものは、

できれば見ずに済ませてしまいたい。

見ていたら生きていけない。

でも、見なければ生きていない。

13

この間、車で出かけようとして、

たまたまガソリンの残りが少なかつたか

ら、

ガソリンスタンドに入ったら、

「タイヤに鋸が刺さっていますよ」

と声をかけられた。

スタンドに入っていなかったら、

そのまま高速道路に入り、

タイヤが破裂して、

死んでいたかもしれない。

走っていて拾ったものではなく、

誰かが意図的に刺したものらしい。

とんだ命拾い。

19

飛行機が落とした爆弾で

がれきの山になった場所で、

僧侶がこう言ったという。

「壊されたモスクを見るのは悲しい。

だが再建するという目標が

私たちに生きる励みを与えてくれる」※3

ケーブルを通して入ってきた情報が、

教えてくれた。

人は支え合って初めて生きていける。

※1 <http://dayspanblog.seesaa.net/article/112508511.html> <http://groups.yahoo.co.jp/group/TUP-Bulletin/message/850>
(飛行機からの爆撃だけではなく、ミサイル砲撃、軍艦からの砲撃もあり、一月三日からは地上戦が始まり戦車が家々や農地を踏み潰し、人々を殺傷した)

※2 <http://news.goo.ne.jp/article/goeditor/world/dir/goeditor-20081230-02.html> 『オハンマ演説集』朝日出版社 p.70
(一部改変)

※3 <http://mainichi.jp/select/world/news/20090221k0000e030051000c.html>

倉田良成

雲のいづくに ——私の小倉百首から

月のおもしろかりける夜あか月がたによめる

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづくに月やどるらむ

清原深養父

オダさんといつも深夜の酒場で詩の話をした。私よりひとり年長の彼は、こんなところで詩のことを言うてたら、なんや、てな顔されるけど、あんたとならその話ができる、と詩の話題に入る前、マクラのように言うのが常だった。髭をたくわえたオダさんは、頭髮は少ないがいつもよい服を着込んで、店でも高いシングルモルトの瓶を入れ、ストレートで少しづつ飲んでいた。けれど何の仕事をしているのか、何回聞いてもよく分からなかった。彼と私はそれぞれ薄い詩集を一冊ずつ出していて、私たちのように無名の存在ではない詩人も共通して、個人的に知っていた。落ち合う店は決まっていた、ほぼ同じ人間が同じ時間に、ほぼ毎日やって来る。店がはねたあと、その女主人と別の店に流れる面々もだいたい決まっていた、オダさんと私もそのなかに入っている。店のない日曜など、女主人と客であるわれわれが、食事会と称して昼間っから飲むこともあった。そして平日の夜はせつせと店に通いつめるのである。ところがある夜からバー・カウンターの端にみごとな花が飾られるようになった。それが毎日新しいのだ。男の眼ではよく判らないが、さぞかしただなろうし、これが毎日新しいとなると、女主人にとってただならぬ何かが起きていると推測された。客がいくら贈り主の名を聞いても彼女は明かさない。オダさんとはここ以外のところでもよく飲み歩いたが、別れぎわに郷里のみやげをくれた

ことがある。家に帰って開けてみたら、富山のいかの黒作りだった。そういえば別の県に富山のはちがう実の母がいて、それでわしは人に愛情を示すのが苦手なんや、と言っていた。そしてだんだん、女主人の店では黙り込みがちになり、違う店では神様や霊の話をするようになっていった。花の贈り主はオダさんである。けれど女主人には決まった相手がいて、店がはねたあと、彼女と別の店に流れてゆく客の一団のなかには当然彼もいた。私も、オダさんも、だが。女主人の店はだいたい夜中の二時か三時には閉まる。夜もだいぶ明けやすくなつた時分、みんなで区役所の通りを越えて、中国人経営の朝までやっている料理屋に入った。薄い青島ビールなどを舐めていると、突然背後で物の派手に倒れる音がする。振り向くと女主人の彼が後頭部を抱え込み、背の小さいオダさんが鬼のような顔をして仁王立ちになり、片手に割れた灰皿を握っている。オダさんが彼を殴つたらしい。坐つてももの三分とたたないうちに、一切の言葉や視線のやりとりさえなく突然に。オダさんは割れた灰皿で掌を切り、女主人の相手ではなく、殴つたオダさんのために救急車がやって来た。その後、オダさんは手の傷なのに神経の薬を処方されたと言って憤り、一方で女主人に、あんたは悪霊や、と言ってみたり、無名でない詩人と私を呼び出して、イエスのことを聞かせてくれへんやろか、と言ったりしているが、救急車はあのとときからオダさんを連れ去つたまま、私たちの所に帰してくれていない。彼はいま、さまざまな霊の飛び交う店で飲んでいるのだろうか。明けてゆく空の、どこ有るとも知れない浮薄な月をつくづくと見る後ろ姿で。次第にあきらかになつてゆく、まばゆい残骸のような街区へ棄てられた児どもみたいに。

からす

近くのコンビニで買ってきた弁当を食べていると、からすが飛んできて板塀の上にとまった。塀は風除けのために囲ってあるだけなので、空からだれでも自由に出入りできる。からすは、空からではなく地上から湧きあがるようにやってきて、塀の上に降り立ったように見えた。大きな羽音がしたと思ったら、もうそこにはからすがいた。わたしがいるのを知らずにやってきたのではなさそうさ。驚いている様子はなし、あわてて引き返そうともしない。板塀のへりをつかんであぶなかしそうに体勢を整えたあと、行儀よくわたしを眺めている。たまたま飛んできて、止まり木にしたのではないと思う。目的はやはり、弁当か。

近辺にからすはいっぱいいるけれども、たいていは電柱の上とか林の中だ。なれなれしく人に近づいてくることはない。それにしてもこんな近くで、一対一で向き合うのは生まれて初めてかも知れない。危害を加えられる恐れはないと思うが、いちおう戦える心の構えをつくる。そして、あわてないと決めて、弁当を食べ続ける。

じつは数日前、こんなことがあった。食パンを食べた残りを袋に戻して車のシートの上に置いておいた。夕方になって、それがどこを探しても見つからない。袋ごとなくなっているのである。おかしいなあ、4枚は残っていたはずだけどなあ。そのときに、からすかもしれない、と少しだけ疑った。でも、ふくろごと啜えて持っていけるものだろうか。ずっとあとになって、からすは目的地から少し離れたところに降り立って、目立たないように地面を迂回してやってくる、らしいというのを発見したのだが、パンの袋を持って行ったときも、塀の上に降り立ったときも、

そんなふう歩いて近づいてきたのかも知れない。

あいにくコンビニの弁当は、からあげなどのおいしそうなものは食べてしまったあとで、ごぼうの天ぷらくらいしか残っていない。なんだか申しわけないような気分になる。いちおう、箸ではさんで、「食べるかい？」と差し出してみた。からすは、平然としている。びっくりもしない。興味がないのだろうか。もつとも、たとえ笑ったり怒ったりしても、わたしにはその表情を読む力がない。人間に声をかけられたらひと声鳴いて返事をする、という義理がからすの側にあるわけでもない。

でも平然と見えるなかに、なにかを感じる。ごぼうのてんぷらなど食べたくないかも知れないが、わたしの足元からそう遠くないところに、ぼいと投げてあげた。

「ほら、おいで」

からすは動かない。羽は行儀よくたたまれたままだし、顔もそっぽを向いているように見える。

「ここにおいとくから、あとでゆっくり食べな」

わたしもからすを無視して、弁当に箸をもどした。

まもなくからすは、なにも言わずに飛び去ってしまった。ごぼうの天ぷらが、地面にそのまま残されている。わたしは弁当のからすを片付けて、大工仕事のつづきに取りかかった。忙しく体を動かしていると、てんぷらがなんとなく邪魔になりはじめる。踏んづけそうだし、カンナ屑や砂利にまぶされて汚れてしまいそうさ。でも、ここに置いておくと言ったからには、置いておかねばならない。からすとの約束だ。わたしのひとり芝居ではあるけれども、その気持はからすに伝わってしま

つた。勝手に取り消したり変更したりしたら、からすはわたしをそのような人間だと判断するだろう。それでもいいのだろうか。

まずいよなあ、と思いつながら、てんぷらをつまんで生ごみのバケツの中に捨て、蓋を閉めた。言い訳のように、もうひとつの気持が頭をもたげる。からすに餌などあげたら、近所迷惑になる。毎朝、ぎやあぎやあ鳴いて騒がれることになるだろう。そうでなくてもうるさいからすを、隣のおじさんとはときどき大声で追い払っている。別の隣人たちは、「家が增えてから、からすも増えたよねえ」とこぼし合っている。からすと友達になろうなどと考えてはいけないのだ。

からすが、てんぷらを食べようとして戻ってきたかどうか分からない。わたしに騙されたと思ったかどうか、分からない。

その後、掘って立て柱に単管を渡してブルーシートの屋根をかけ、板塀の隙間にビニールを張りつけたりして、少しずつ雨風をしるげのように囲いを改造していった。空から誰でも訪問できる状態ではなくなったのだ。

それでも外出して帰ってくると、小屋からからすが飛び立つことがあった。慌てて逃げていく。りんごがつつかれていたり、食べ残しの焼き魚がストープの上から持ち去られたり、外の水道栓のところの石鹼がなくなったりした。あのときのからすだとしたら、慌てて逃げていかなくてもよさそうなものだと思うのだが。

この地にこれからわたしは、自分の手でつくり家を建てようとしている。いろいろ勉強をして乗り込んできたつもりだが、実際は途方に暮れている。空が青くひろがっていて、日差しが暖かい。この先の果てしなさが、弁当を食べているわたしの全身に降り注いでいる。そんなとき、一羽のからすがやってきた。羽の色も艶も、匂いさえ感じられるほど間近に止まって、わたしと向き合う。餌を狙って、と考えたのはわたしの間違いで、もしかしたら挨拶にやってきたただだったのかも知れない。

「初めまして。わたしはこの近在で暮らしているからすです。ここに、これからお住まいになるのですか？ そうだとしたら、今後ともどうかよろしく願います。仲間たちを代表して、挨拶にまいりました」あるいは、「あたらしい人物や建物が出現した場合に、いちおう偵察に入らせていただくことになっております。こんな間近でお目にかかるのはこれが最初で最後になるかと思いますが、家族と仲間たちには、たいして危険な人物ではなさそうだと、という報告をさせていただきました。思います。それでは」と、飛び去って行く。不思議なことかも知れない。からすが訪ねてくれただけでわたしの気持が動きだし、からすが去ったあとも、その余韻が何日もあるいは消えることなく、わたしのなかで生きつづけていたりするのは。

てんぷらを差し出したわたしの気持は、気持とはいえなかったようだ。目の前からからすが天ぷらを食べてくれたら、初めてわたしの気持もはつきりする。そんな種類のものだったのではないかと思う。からすにも気持があり、わたしにも気持があると思いついてきた。からすの気持をつなぎとめようとし、見失いかけていたわたしの気持を確かめようとした。相手が誰であれ、なんであれ、気持を通い合わせることできたらすばらしい。それが無理なら、通い合ったと感じさせてもらえるだけがいい。たとえ錯覚であっても。拒絶されたり、無視されたりするよりは。

わたしは最初から手のうちを見せてしまった。からすは、見せなかった。からすはわたしの気持など信じていないような気がする。信じようにも、信じようがないのだよ、とわたしに教えてくれようとしたのかも知れない。二羽のからすが電線にとまっている。一羽は超然としている。もう一羽が、超然とした一羽の顔を覗き込んで、かあかあと話しかけている。延々と。いつ止むともしれず。超然としたからすは、超然としたままだ。うるさいなあ、とわたしは思い始める。

悪人正機説について 1

平成二十一年一月二十八日、いちどきに四人の死刑囚の刑が執行されたという新聞記事を読んだ。彼らの犯した罪科が列挙されていたが、おのおの内容は凄惨というしかなく、具体的にここに書くことはしない。前非を悔いる手紙を書いて謝罪したものもなかにはあるが、ある被害者の遺族は、ああは言っているがまだ嘘をついているとしか考えられず、信用できないとして、死刑囚の謝罪を受けられようとしなかった、という記事も併せて読んだ。また、これに先立つ一月二十日、名古屋のいわゆる開サイト強殺事件で、派遣社員の女性を、彼女の命乞いにも拘わらず、無意味に撲殺して山中に遺棄した三人の男の被告に対し、検察側は全員に死刑の求刑をおこなった。証言台に立った被害者の母親は、ゴキブリを殺すのも人を殺すのも彼らにとつては同じこと、死をもって償ってもらいたい、と述べたという。

これらの記事や報道に臨んで、私もまた他の大勢と同じであろう烈しい嫌悪と、被告や犯人に対する深い怒りで身が震えた。私にも家族がおり、それに準えて考えたとき、秋霜烈日の断の思いが身をつらぬくようだったのだ。だが、としばらくして考えた。私はむしろ第三者であり、ある意味で無責任な観衆にすぎず、この身をつらぬくばかりの思いもやがて日常の他の何かに取って代わる。しかし遺族はどうであろうか。彼ら当事者は一時の観衆ではなく、その苦しみは恐らく彼らの愛するものに手を下した人間の死をもってしても絶対に消え去ることはない。「ゴキブリを殺すのも人を殺すのも同じ」と言つて、被告らの極刑を「希^{こぼ}うとき、世界は負の極限のポテンシャルに措かれるのであり、ある意味で遺族のそれからの人生はこの負の關係に担保さ

れる不可逆性を帯びることになるのだと思う。被告らは、あるものは涙ながらに謝罪し、あるものは何も申し上げることはないと言つて謝罪しなかったと、のちにその名古屋地裁の法廷でのことを報道で知った。被告側の謝罪が本心からのものなのか、あるいは別の被告の謝罪拒否の言辞のうちに真実を見るべきなのか、にわかには判らず、またそれを断ずることも無意味であると考えるが、いずれにしても負の極限の關係の一項として、被告らもまた、被害者遺族あるいは被害者それ自身と密実^{ひそかに}に共有する、同一の入会地の中に存在することになったと言えるのだ。

この關係は何だろうか、と私は長大息する。わが子を殺された女性が、殺した犯人の存在の廃滅を望む感情は当然であろうが、「ゴキブリを殺すのも人を殺すのも同じ」という論理は、それゆえに被告には死をもって償わせる帰結を導くと同時に、「ゴキブリ」を媒介に、ほんらい異なるディメンションに措かれるべきわが子と、犯人らとを、同じ絆で結びつけることになりはすまいか。わが子の重い存在が「ゴキブリ」並みに抹殺されたとしたら、その代償として地上から抹殺されなければならぬ被告たちの存在は、わが子並みに重くなければならぬはずなのに（これは逆説である）、わが子に与えられたのと同じ死という選択肢しかない以上、彼らの存在はじつのところ「ゴキブリ」並みに軽いことになってしまふ。つまり、同じことだが、わが子の存在もまた「ゴキブリ」並みに軽いことになってしまふ。この、遺族感情からすれば一種の地獄であるべき循環する論理は、犯罪の代償としての死刑に常につきまとう問題なのだと思う。ああ、救われないな、とも思量する。何をもってしたら真に償わせることになるのか。

この負の關係の常在をそのままにしておいてよいものか。

このとき、ふと親鸞の悪人正機の説が心を過った。と言つてただちに歎異抄に到つたわけではない。前になりわいの仕事上のことで少し調べたことのある、脳性麻痺の障害者団体「青い芝の会」の精神指導者的な立場にあつた仏教者・大仏空師おほぶつあきしの、独特の歎異抄理解、その悪人正機説がふと思ひ浮かべられたのである。

悪人正機とは何か、基本的なことなので、少し長くなるが、これについては歎異抄から、よく引かれる部分の全文を引用しておきたい。

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善ひざんのひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死しよじをはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正しやうじん因いんなり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。

(三章)

伝聞されたこの親鸞の言葉は難解だと思ふ。悪や悪人とは何なのか、善人と「自力作善のひと」ははたして同じなのか、いくら読んでよく飲み込むことができない。この場合の善も悪も、実体として捉えようとするといつの間にかするりと消えてしまうような、そんな概念みたいな気がする。いいかえれば、自体としてでなく、關係というものの中でだけ生起している概念のような気がするのだ。

大仏師の所説については山森亮著『ベーシック・インカム入門―無条件給付の基本所得

を考える』(光文社新書)で、次のように要約されている。

悪人正機——すなわち「悪人こそまず救われるべきである」というのは、仏教の教えるところの善い行いに集中できる物理的な基盤をもつ支配層の人々ではなく、生きるために殺生を行わざるを得ない労働貧民こそ救われるべきであるという意味である。そして現代において、「善い行いとは究極のところよく働くことだ」とされている。そうした善い行いから排除された人々、すなわち障害者こそ救われるべきではないのか、というわけである。

(127頁)

「青い芝の会」については、ここで詳しく触れている余裕はないので省く。しかしこれに関わる大仏師の悪人正機読解から私が連想したことは、悪人とはもつとも救いから遠いもの、不可触的な汚穢に属するもの、見捨てられ忘れ去られ、忌諱の対象たるべきものであり、それは(脳性麻痺という)障害者もそのうちにふくまれる被差別者たちといいかえて間違いないのではないか、というものである。世界で一番低位のところにいるこれらの者たちからまずさきだつて緊急に、濟度されなくてはならないのではないか。善人や、心や体が健常の身のものの濟度は、そのあとからゆつくりとでいい。「青い芝の会」や大仏師の言わんとするところから少し(あるいは大きく)外れるかも知れないが、おおまかにこんなことを、彼らの所説を機縁として思ったことであつた。先の歎異抄本文に比べ、明快と言えれば明快である。

ここに私は重ね合わせて考える。前述の被告と犯罪遺族のなかで、悪や悪人とはもちろん被告人の側に、世俗的には帰せられる概念のほかではない。けれど、被告人と犯罪遺族の關係も、救いからもつとも遠く、通常の社会生活上からは不可触的な禁忌の部分もふくむ、判決や刑の執行ののちは世界から見捨てられ忘れ去られる、そういった負の要素

の入会地としての「悪」に属するものなのではないだろうか。この「悪」は、常在として、世界の中にいつまでも置かれつづけてはいけない。犯罪遺族を悪や悪人と同一視するものと、口が裂けても言えないことを言っているつもりでは毛頭ないけれど、彼ら彼女らもまず先に取り急ぎ緊急に救済されなくてはならない、そういう存在だと言っているのだ。いわばそこにいるだけで存在論的な深みの中にあると言える。ほんとうは被告犯人と同質のくらやみの中にある、と言ったら、もし過つことになるのであろうか。ここで危機の中でだけ許される「選別」の行為、救急医療の現場で言われるところのトリアージ（治療の優先順位）という言葉が思い浮かぶ。その言葉からまた秋葉原事件のことなども連想されて、思いは複雑なのであるが。

このとき親鸞の悪人正機の思想を、もっと具体的に知りたいと思った。具体的に、とはただ歎異抄をひらいて、そこに示されている近代以降を思わせるような思想や逆説に驚いたり惹かれたり、という恣意的な読み方ではなく、その歎異抄が説く「悪」の問題を、浄土真宗の教典である親鸞著、教行信証をたよりとしてどうか、少しでもそれが導く思考の野のなかに探ってみようかと考えたのである。うまくゆくかどうかは判らない。

畢竟するところは同じ海に帰することになるのかも知れないが、歎異抄と教行信証とは、悪のニュアンスが少し異なるように見える。

歎異抄では、悪ないし悪人とは、「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるもの」や「野やまに、しゝをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがら」という所業およびそれを為すものである。また、たんに、「あきなひをもし、田島をつくりてすぐる」一見罪なき民も、前二例、漁獵者のごとき悪業をまぬかれてはいるわけではなく、「たゞおなじことなり」と親鸞は言っている。ひとはみな業縁を背負って生きており、煩惱具足の存在に

異なることはないのである。これだけ見ていると、却って悪とは日常を壊すほどの極端なものではなく、平時の道徳律の範囲を出るものでないようにも思える。だが、この例しを引く同じ歎異抄十三章の冒頭近くで、若い唯円坊が親鸞に、お前はわが言うことを信ずるかとお聞かれ、唯円がはいと答えると、かさねて、それではわが言うことに違背することなきか、と言われたのでつつしんでお受けしますと答えると、「たとへばひとを千人ころしてんや、しからは往生は一定すべし」と言ったとある。これには後半部分があるのだが、それはひとまず措き、こういう箇所を眺めると、親鸞のいた中世という世界の乾いた暗さや、つくづく乱世であったのだなあ、という感慨がしきりに興ってくる。悪人正機の悪は、こういうところから想像されるように、一つの道徳律の範囲の内にとどまっているものから、酸鼻を極めた所業に到るまでの大きな幅を持つていた気がするのである。

これに対して教行信証では、悪は歎異抄におけるような、善と対になって言及されるごとき反語に似た言い方でなく、もっと端的積極的に、まずそこから主だつて、濟度されるべき概念として捉えられている。むしろ歎異抄の、まず悪人から往生させよ、という思想もそれだけでひとつの緊急性、切迫性を有するとも言えるのだが、教行信証では悪や悪人の問題はさらに真正面に据えられ、經典教義をはじめ、思考の全力を挙げて正面突破すべき中心課題、という姿をとつて現れてくるのだ。その悪を具体的に言うことができるが、それは悪の中でももっとも救われたいと仏教では理解されている、父殺し、および潜在的母殺しをふくむ、五逆（殺父・殺母・殺阿羅漢・出仏身血・破和合僧）、それと誹謗正法（濟度の大綱さえ謗り、あざわらうこと）の大罪のことである。ほとんど神話に届くような幽邃な説話が、教行信証一巻の最中心部に置かれてある。阿闍世王の物語であるが、これは観無量寿経（觀經）や大般涅槃経（大經）などが当該物語のそもそもの出典となっている

という。ここにおいて、深く救いのない悪にたちむかって済度すること、この世界の言葉で言う大悲というものが、するどい結晶のように教義の中心を形成していることが理解されてくる。

では阿闍世王説話の大略について、筋書きだけでも述べておかなくては話は始まらないだろう。教行信証においては本文の多くが経文の引用などから（物語が）成っていて、つづれ織りのように一読錯綜きわまりない印象がある。ここでは、この著名な物語の要点を簡明に押さえた今昔物語集（天竺・震旦部）を参照しつつ、以下に示す。

摩伽陀国の王舎大城に阿闍世王という王がいた。彼に提婆達多（釈尊のいとこに当たる）というものが近づいて、自分は釈尊を害するから、あなたは父の大王を殺して新王になれとそそのかした。阿闍世王は提婆達多の言うことを信じて、父・頻婆娑羅王を捕らえ、人知れぬ場所に幽閉して飲食を断ち、干乾にして責め殺そうとする。そのときに后・韋提希夫人は大いに嘆き悲しんで、その身体にむぎこに和した蘇蜜を塗り、瓔珞の中にぶどう液を隠し持って幽閉された王の所へ行き、飲ませかつ食べさせて王の命を長らえさせる。阿闍世王は頻婆娑羅王がいつまでも死なないので、どうしているかと不審に思つて幽閉場所の番人に事情を聞くと、番人は、后がやってきてこれこれのことを為しているので王は生きてきているのだが、制止することかなわず、今に至っている、と申し上げる。阿闍世王はこれを聞いて大いに嗔りをあらわにして、「わが母韋提希は賊人のともがらなり」（『今昔物語集』）と言ひ、剣を抜いて母の韋提希夫人の首を斬ろうとする。ここに名医でもある耆婆という大臣が進み出て申し上げる。わが君はどうお考えになつてこのような大逆の罪を造ろうとなさるのか、経典などには父王を殺したおびただしい王の例しは確かに記されているけれど、いまだ無道に母を害した人のことを聞きません、大王よ、よくよくご思慮なさつ

てこの悪逆を思いとどめられよ。阿闍世王はこれを聞いて非常に恐れ、剣を捨てて、母に手をかけることはしなかつた。その一方、父王はついに死んだ。（母后はそのまま幽閉され、そのなかで釈尊の説法を受けた。これがすなわち観無量寿経である。その後の韋提希夫人がどうなつたかははっきりしない。あるいはそのまま釈尊の説法を聞き、恍惚裡に獄死したのでは、との見方がある。）年を経て、釈尊が鳩尸那城拔提河のほとりの沙羅林において大涅槃の教法を説くということがあつた。つまりこれは、釈迦が涅槃に入る・入滅することをも意味するが、耆婆大臣は老いた阿闍世王にかの仏のもとに行つてみずからの罪を懺悔することを強く勧めた。王は犯した罪におそれおののき、仏は自分に目をかけてくださることはあるまいとか、私は逆罪を造つたので無間地獄に堕ちるであろう、仏が私を見たてまつても罪が減することはないとか、自分ももう年老いたのでいまさら恥を見せたくもないとか、いろいろに言い分けて耆婆の忠言から逃れようとするが、大臣の懇切な勧めでようやく重い腰を上げる。諸大臣をはじめ無数の供のものを引き連れて釈尊のもとに至るに、仏は大王を見てたちどころに未来成仏の予言を与える。仏は言った。もし私があなたの罪業を消滅せしめることができず、あなたを仏道に入らせることができなければ、私は仏として在つてはならない。今あなたは私のもとに來た。もうあなたは仏道に入つていて、と。これが父殺しの阿闍世王の物語である。

（以下次号につづく）

confidence

俳優は目と体の動き、そして声だと思う。意志の力で、目から照り返される光の質まで変えてしまうような俳優がいい。体の動きについては、工夫と鍛錬で上達できる。ところで声は変えられない。メークもできない。唯一、生まれつきの、不平等なものかもしれない。(後藤)

とじこもる時間が長くなっていて、×秘ぎみ。せつせと腹筋するくらいでは間に合わない。原野の快×がなつかしい。(木村)

近所の幼稚園に河津桜があつて、やはり他の桜よりも早く咲くわけですが、今年は二月のうちに咲いてしまったので驚きました。暖冬と言われながら、そういう実感があまりなかったのですが、こちらが干からびてきて、大した寒さでもないものを寒く思っていたのかもしれませんが。(長尾)

最近、立て続けにインターネット経由で夭折の画家・今村紫紅に関連する書籍を二冊購入しました。最初に手に入れたのが昭和四十年に横浜・伊勢左木町の有隣堂本店で開催された「今村紫紅展」の図録。ほぼ全部の図版がモノクロの掲載であるため若干物足りなさを感じるものの、ここには朋友・安田靉彦が「紫紅と私」というタイトルでその出会いから死別までのいきさつを細部にわたって述べたとても貴重な文章を寄せています。もう一冊は最近余り見かけなくなつた大判画集で、集英社版の現代日本美術全集の第三巻「菱田春草／今村紫紅」。こちらは概ねカラー図版ですが、巻末に戦災で焼失してしまつた「獅子」や「入る日・出る月」のモノクロ図版が掲載され

ており、考古資料として希少性があると思えました。前者は福岡県北九州市の古書店から直接購入し、後者は兵庫県川西市の古書店がネットオークションに出していたものを自分が落札して購入しました。(秋川)

国家試験も終わり、受かった場合有資格者として存在することになる。受からなかつたら、別だけど。ソーシャルワークって仕事はお節介にも他人の人生に口出す面がある。だから、そういうソーシャルワーカーや支援職って何者？ あるいはどういう立場でそんなことができるのかって、それが昔から気にかかつていた。だからべてるの家という精神障害者当事者の事業体のひとの話とか聞きにいったんだけどなかなかこれが。でも人に関わるつてのは功と罪の両方があるつて気づいた。というか思い出した、昔介護の仕事してた頃のこと。例えば自分がなんでこんなことやっているかわかんないとしんどいかったし、いろんな人からあれこれいわれたり当事者の人と喧嘩すると、どう考えたらいいか途方に暮れた。最近プラトンの『国家』やトマス・モアの『ユートピア』をめぐっていると面白かった。みんな共同の作業をするにあたってどういう立ち位置で考えたり話すことが最善か。こんな昔からすごく徹底して考えてたから、昔からそうなら僕が不安になるのも無理なしだと安心した。どんな分野にもいえることかもしれない。文学も、かな。(石川)

連作の第二回目です。しかし連作と呼ぶことには一定の留保が必要でしょう。

その間には、近藤さんと某所で続けてい

る連詩の木霊が不安定に横たわっている、ということに無自覚ではいられないからです。

最近ベッドでの生活になりましたが、敷蒲団との大きな違いは、ベッドの方が掛蒲団が重く感じる、ということudur。これは発見でした。(高塚)

2月いっぱいまでこれまで六年勤めてきた仕事を退職した。高知から千葉に戻り、再就職しなければいけない。「が折れた腕や」は残すところあと一回。ともに、どうなることやら。(近藤)

教員を辞めた後、証券会社に四十年ほど勤めた父は今も日経新聞にこだわります。毎朝、手にとって眺めています。人生の中で大切にしてきたことをこれからも大切にしたいと思っています。もう、新聞に何が書かれているのかあまり読み取れていなくても。(福島)

この冬はほんとうに、いのしし肉をよく食べました。ナンプラーと醤油で煮ると非常においしいです。それにしてもこの一ヶ月はねじりはちまきで、孫悟空のようにあたまがきつかったです。

お誘いくださった倉田さまにあらためて感謝申し上げます。(タケイ)

4:00。土曜日だというのに、早朝覚醒です。

まあ、睡眠不足になっているわけではないですし、(土曜日ですが)遅刻の予防にもなるので、便利といえれば便利です。ただ、始発前に目が覚めたりすると、時間をつぶすのが面倒です。また、尾籠な話で恐縮ですが、トイレに行きたくなって目が覚め、用を足したらまた眠る、というのではなく、完全な覚醒です。二度寝はできません。

そのあたりが、病氣と言いますか、融通が利かないので、困りものです。(野村)

芥川也寸志の創った『新響』の、没後二十年の記念に当たる演奏会を聴く機会を、詩人のSさんに頂いた。すばらしいコンサートだった。

高校の友人に、芥川のお嬢さんと小学校で同級だった男がいて、そのうちマエストロに会いに行こうと話していたが果たせなかった…。

大学では、芥川の兄貴分の作曲家小倉朗のお嬢さんが先輩にいて、卒業後彼女が校門のそばに開いた喫茶店『ラヴアド』で、書けねんだよ、コンチェルト！といつも嘆いている小柄な色っぽい爺さんを憧れをもって眺めた…。

けっきょく遺作になったその協奏曲の初演を、芥川新響で聴いた…。

*

Berceuse は、芥川也寸志作曲『絃楽のための三楽章 一トリプティック』から、第二楽章「子守歌」。(和山)

先達て三日間だけ特別に、朝起きて会社へ行き、午前中仕事してひるめしに行き、また午後から仕事して八、九時間会社で過ごすということを久しぶりにやった。冬の晴れた昼、じぶんの軀だけがまるで黄泉の国から戻って来て働いているかのようだった。休憩時間にドトールでテイクアウトのコーヒーを買ったとき、流れてきた煙草のけむりの匂いの中に、十年前の私の姿を確かに見た。(倉田)